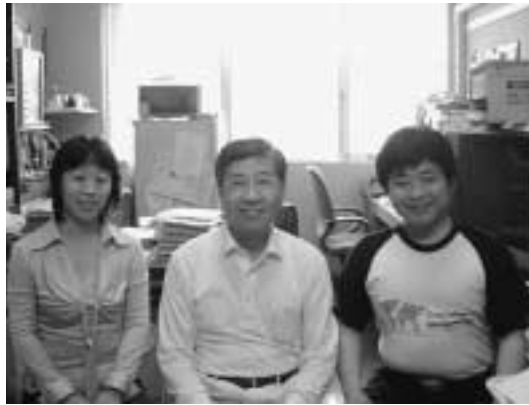


環境共生科学プログラム

早瀬 光司研究室



部屋番号	B505
オフィスアワー	火13：10～16：30 木13：10～16：30
メールアドレス	khayase@hiroshima-u.ac.jp
授業内容	化学実験 化学実験法 人間と地球化学

○研究内容

具体的な環境問題すべてがテーマです。分かりやすく言えば地球環境問題、ごみ問題、社会環境問題、環境経済学、環境経営学などです。

私の研究室では、学生がある環境問題をやりたいと言ってきたら、それをできるだけ尊重するようにしています。例えば卒業で学内のリサイクル市を提案してきた学生がいました。そのリサイクル市とは四年生が卒業するときに使わなくなった家具や電化製品などを新入生に譲り渡すことにより環境負荷を削減させるものですが、それが卒業研究の対象になるかならないか検討しました。そして、充分卒業研究の対象になる実験計画を伴っていると判断してその学生にやらせましたところ、大変よい卒業論文になりました。学生の意見を尊重するのが早瀬研究室の特徴です。

私が現在主にしている研究は「環境経営」というものです。これは企業や地方自治体（県市町村）がどれだけ環境にやさしい経営をしているかについての研究です。私たちが日常使用しているもの、用いているもの

は、全て企業がつくったものです。そして、それらのものがいずれ廃棄物になるという点において、企業は基本的に環境問題から逃れられない責任があるわけです。もちろん企業としては良いものだと思いつついているのだけど、後で処分ができなくなるものができたりする。したがって、企業が環境問題に対してどのような方針で経営をしているか、その経営においてどのような環境負荷を与えているか、ということを明らかにすることが環境問題においては重要です。そのようなことを研究しています。

具体的には、企業に情報公開してもらって、そして企業にAからEまで五段階にランクづけをしようとしています（これを環境経営格付けといいます）。例えば最上級のAランクだと、「地球環境保全に向けて最大限の努力を傾け、積極的な環境経営、情報開示を実現している。」という具合にランクづけを行っています。DやEランクは情報公開すら行ってくれない企業に付けています。Aランクの企業は極めて少ないけれど、Bランクなら少しはあります。企業は財務経営は念頭にあるが、環境経営は残念ながらあまりしようとは思っていません。財務経営ばかりに目を向けていると、後から環境によくない製品や廃棄物が出てくる。そうなるといけないから、「もう少し環境に目を向けた経営をするべきである。」とDやEランクの企業に呼びかけようと考えていま

「理系と文系の両方を勉強し、それらを自分の頭の中で融合させて 「一人総合科学」を創ってほしいです。」

す。製造業千社の企業に調査票等を送って、回答してきてくれた企業が二百八十社でした。少なすぎてこれではいけない。企業は社会的な公器として自ら情報を開示する姿勢を持たなければいけないと思います。企業への質問票と同時に「環境関係の資料があるなら送って下さい。」と依頼し、その内容を調べて環境格付けを行っています。この作業を毎年行っており、少しずつ環境報告書を送ってくれる企業が増えてきています。

○きっかけ

もともと私は化学が専攻であり、最初は分子間相互作用の研究などをやっていました。後に地球化学という学問分野で海の有機化合物を調べていて、環境って大事ななと感じ、環境問題は自然科学だけではなく、社会科学なども融合させなければいけない、そこが総合科学部の一員として私がやることだと思ひ、総合科学を体現するものとして地球環境問題の研究を始めました。

○研究の楽しみ

一つ目は、社会に役立つ研究をしているという楽しさ。二つ目として、研究そのもので楽しいことは、世界で初めてのことを

やっているとということ。小中〜高校まではすでに確立されたことを教わる、大学三年生までもそうなのですが、四年生から（及び大学院）は世界で初めてのことができ。大学とはそういうところ。世界で初めてのことは楽しいしワクワクしますよね。学生と共に研究を進めていて「学生の成長」というのも大きな楽しみです。

○趣味

昔はいろいろやりました。テニス、スキー、バドミントン、スキもやりましたね。将棋、囲碁。旅行も色々な所へ行きました。日本全国の都道府県で泊まったことのない県は徳島県だけです。

北海道はいいですね。行くとしたら6月頃は花が咲いていていいし、冬もまたいいですね。寒いところは冬に行くのがいいです。札幌の雪祭りに行ったとき、温度が低すぎて、水に触っても手に水がつかなかったのはびっくりしました。

大学院生のときに、ヨーロッパは大体のところは行きました。9月にモスクワで研究発表をして、シルクロードも行って、その後私の先生は日本に帰られて、私は一人でヨーロッパ旅行に行きました。おもにユ

ースホステルに泊まって、西ドイツ、スイス、オーストリア、フランス、スペイン、モロッコ、スペイン、フランス、ベルギー、イギリス、アイルランド、タイというふうに廻りました。ヨーロッパ本土はユーレイルパスを使って特急で廻り、イギリスは電車が高いのでヒッチハイクをして旅をしました。お城に泊まったりもしました。十一月の終わりに日本に帰りました。3ヶ月の海外旅行でしたが、今でも鮮明に思い出せるくらい楽しかったです。皆さんもぜひ行ってみてください。

○学生に一言

自分自身について、自己発見が大事です。どれだけ自分のことを探れるか、それが大切です。また、自分が本当は何をしたのか、これも大事です。

また、総合科学部の学生として自分の頭の中で総合科学を創ってください。言ってみれば「一人総合科学」です。そのためには理系と文系の両方の知識が必要です。両方をしっかりと勉強してそれらを自分の頭の中で融合させて「一人総合科学」を創ってほしいです。

（担当 17生 鈴木宏弥）

地域科学プログラム フンクカロリン研究室



部屋番号	A726
オフィスアワー	火16:00~17:00 金14:00~15:00
メールアドレス	funckc@hiroshima-u.ac.jp
授業内容	地域地理学A 人文地理学B ヨーロッパ地誌研究演習 ヨーロッパ環境地誌 親族・ 家族から見た伝統と現在の諸相 地域の分析

○研究内容

専門は地理学で、その中でも特に観光地理学を研究しています。観光地理学というのは例えば「なぜある所に観光地ができる、ある所にはできないのか。」「どうして人は旅行するのか、またどういう所に旅行するのか。」といったことを考えるものです。日本では特に瀬戸内海、その中で最近では宮島について調べています。日本では今、外国人観光客を増やす政策を国が取っているのですが、それに対しての地域の取り組み方を考える必要があります。外国人観光客が本当に増えて欲しいのか、増やすためにはどうすればよいか、外国人と日本人の見ると宮島の違い、といったことを最近の研究しています。

○きっかけ

今から十七年前になるんですが、最初に日本に来た時、ドイツとの文化の違いとして気づいたことのひとつが、余暇の過ごし方や、旅行の仕方の違いでした。それが興味をもったきっかけのひとつです。もう一つ

は、ちょうどその時、総合地域整備法（リゾート法）という法律が出来て、全国各地で大きなリゾート施設を作る動きがあったんです。つまり地域おこしに観光を利用しようという動きだったのだけれど、その後の推移や、失敗要因などに、非常に興味があったんですね。もちろん最初の計画段階での地域の姿勢にも興味がありました。

○日本とドイツの余暇の過ごし方の違い

一番大きな違いはやはり、旅行の仕方ですね。長さが全然違います。そうすると行き先である場所と接するのが長いから、自然と、その場所との関わりが深くなります。

またヨーロッパは余暇に割く全体的な時間も長く、外で過ごすレジャーが多いです。そして、一つのレジャーにあまりお金をかけずに楽しめますから、レジャーの数は多くてもかけるお金は日本とそんなに変わりません。日本の余暇の過ごし方もだいぶ最近変わってきていますが、大きくヨーロッパと違うのは、ドイツだと日曜日は店が閉まるんです。都市に行っても何も無い。日本は、日曜日にはどこかの都市や中心部に出入りが多いですね。

○日本を研究の場にした理由

最近では大学を卒業して、一年間くらい外国に行ってみたいと思っていましたね。それがたまたま日本に行く機会があり、一

自分が何をやりたいのか、どういうことに興味があったって、何を調べたらいいのかということをもっと自分で考えることが必要だと思えます。

年間、日本に日本語の勉強をしに来ました。

そしてドイツ語を大学で教え始め、せっかくなら自分の研究もしたので、そこから観光やレジャーといった、地理学を研究し始めました。

○日本全国の観光地を廻られたことは？

沖繩にはまだ行っていませんので、全国では無いのですが、あちこちに行っています。観光系統の学会ですと、観光地で実施されることが多いので、その関係で行くこともあります。自分の調査する場所は瀬戸内海が多いのですが、岐阜の山の方にも行ったことがあって、結構いいところにも行けますね(笑)。

都市の観光よりも、農村部などの観光の研究のほうが多いですね、きれいな所に行きたくて、都心には行きたくないと言う人もいるから(笑)。こういう所はこの研究の大きな魅力でもあります。ただ、人が何故そこに旅行をして、何を旅行に求めているのか、ということ是非常に調べにくい点です。

○学生生活

地理学なので、実際にあちこちに行っていて回る、巡見が多かったです。年に一、二回は違う街や地区に足を運びました。私の場合にはたまたま運良く、当時まだソ連だった地域に行つて、今ではもう見られないような状況を見ることが出来ました。

また、ドイツでは実家通いではなく学生同士がルームシェアリングすることが多く、それも学生生活の重要な一部でした。違う分野の人と一緒に生活することで、色々な話も聞けるので楽しかったです。

○趣味

合気道です。それが日本に来たきっかけの一つです。西条で、他の外国人二人と、一緒に道場をやっています。ドイツにいた頃からやっているもので二十年くらいになります。ドイツでも合気道は知られていて、私に通っていたドイツのクラブの方が、この辺りのクラブよりもずっと大きかったです。居合も少しやることがあります。あとは泳いだり、ヨットに乗ったり、海に係することも好きですね。

○学生に一言

私はいつも、時間がかかるからあまり板書をしません。「黒板に書かないからメモをとれない」と言われるのですが、メモを取るといことは、自分で聞いて、何が面白いかに判断して自分で取るものであり、教員が黒板に書いた物だけ写す、ということではないですね。あるいは自分たちがテーマを設定する時、なかなかテーマにたどり着けないとか、何をすればいいのかわからないとか、そういった所はもう少し自分たちで考えることが必要です。

(担当 17生 見世梨沙)

人間科学プログラム 青木 孝夫研究室



部屋番号	A716
オフィスアワー	木13：10～14：40
メールアドレス	aokit@hiroshima-u.ac.jp
授業内容	アートの世界と哲学 芸術学B メディアリスニング 芸術思想演習 ことばを問う 博物館実習B 比較美学 比較美学演習B 比較文化論

○研究内容

私が今進めている研究領域ないし方法は、比較美学というものです。一方で日本の美学や芸術に関する思想を研究していますが、それだけではありません。

比較美学というと、一般の人は西洋と日本の美意識や芸術思想の比較だけをしているのかと思うかもしれませんが、日本の文化の生い立ちとなっているアジアの内部でのつながりも大事ですので、中国・韓国の美や芸術に関する思想も知る必要があります。これらの地域を調べることはなして西洋文化との比較ばかりしては不十分です。「比較文化」という授業もしていますが、たまたま今年度は日本と外国の文化を比較する比較文化という学問の批判に始まり、日本の美意識はどのように捉えられてきたかを分析し、日本文化はどうあるべきか、そもそも日本文化という「国民文化」を特権化すべきかどうかということを教えつつ考えています。「国民文化」を尊重すること（例えば、国宝の指定・保存や教育）の意味

や、日本らしさに惑わされず個人が勝手に文化的実践をしていくことの意義、ひいては文化に関する公共的な意義と私的な趣味との協力や対立の問題も教室で学生諸君と共に考えています。

世間では日常から遊離した文化現象と考えられがちの芸術や美的文化も、実は政治や経済と極めて密接に関わっています。われわれはゴッホやベートーベンの作品はよく知っていますが、インドのあまたある美術についての知識は非常に少ないのが実情です。かつて天竺として意識していたインドを今、それほど意識しない理由は、圧倒的な力を西洋が持つており、それゆえに不断に西欧文化の影響にさらされて不知不識に西洋のことを学んでいるのに対し、インドとは地理上での距離よりも政治経済上の距離、いいえ意識の上で疎遠になった結果、我々はインドの文化について無知なのです。学問だけでなく生活のレベルでも西欧は浸透してきています。だからこそ、近代化の過程ではいつも、かえって日本らしさが追い求められているのです。

美学の研究というのは高級芸術や文化だけではなく、私たちの日常生活や倫理と一体になった美意識も問題にします。たとえばヒップホップのファッションや和菓子、またスポーツのファッションなども研究

大学では将来の職業や生活に備えるだけでなく、学生生活や職業生活を通し或いは共に築かれる、しかし生活に還元されはしない人生の基盤を大切に培って欲しいと思います。

の対象としています。

私自身は、誰か偉い天才が作ったと言うわけではないけれども、現代まで伝わってきた文化を大切にして、それを実践することにもすばらしいと思います。書道や茶道や短歌のように、プロの人に加えて、広く素人が実践していることを評価して「芸術やって楽しめれば下手でもいいじゃないか」とも思いません。現代に於ける写真やビデオそしてカラオケもそうでしょう。結果としてすばらしい作品を残したいという傑作意識よりも、撮りたい、そして思い出を刻みたい、また歌いたいなどという率直な要求をもっと素直に活かすべきではないかと思えます。以上は、ある意味で、現代が許してくれている芸術の主体化もしくはプライベート化と言つてよいことです。

芸術の公共的側面に思想的な関心を一貫して抱く一方で、私は芸術を味わい実践して楽しければそれでいいし、感動はまして素晴らしいし、また苦勞してうまくなろうとすることも素敵と言わば芸術の私的活用ないし実存的利用の意義を、現代という時代の中で考えて理論化しようとしています。

○きつかけ

この研究をしているきつかけは、誰でもそうなのでしょうが、思春期の或る時期、身の回りの人や社会現象をサンプルにするだけでなく、書物や芸術をサンプルにして社会や人生を考えるようになりました。芸術は世界を生き人間を理解するためのメディアとしての一面も持っているのです。芸術はわれわれが生きていく上で欠かせない環境です。人間と言う概念の中に織り込み済みなのです。

私は芸術に惹かれてきたというよりも、いささか気障な言い方かもしれませんが、芸術なしには人生を考えていくことはできないと皆さんの年齢の頃に感じ始めていたのです。その段階から芸術について反省しようと思ひ、自覚的に研究を始めるまでにはだいぶ時間がかかりましたが、芸術が世界に於いて、とりわけ我々の人生の中でどのような役目を果たしているのだろうかというところから私の研究は発祥しているのです。

(担当 16生 木村光宏)



言語文化科学プログラム

盧 濤研究室



部屋番号	A526
オフィスアワー	火15:00~16:30 木9:30~10:30
メールアドレス	lutao@hiroshima-u.ac.jp
授業内容	ベーシック中国語Ⅰ・Ⅱ 総合コミュニケーション中国語ⅠA・ⅡA インテンシブ中国語ⅠA・ⅡA 現代中国語学研究 中国語文章表現法演習Ⅰ・Ⅱ 統語論C

○研究分野

分野はいろいろありますね。学生時代は日本語でした。その後日本に来て、関西の大学院で中国語学をやっていたんです。博士課程では言語学をやっていました。今は総合科学部に来て、主に中国語を教えています。また、六年ほど前から、大学院の社会科学部で「異文化交渉学」も教えているので、言語学と並行して、文化のことや、言語学の応用というか、言語コミュニケーションにも関心を持って、勉強したり、授業の中でも話をしたりしています。

言語学といってもいろいろあるんですが、最初は、日本語の単語の意味とか文法的なことを研究していました。例えば日本語の「のむ」は、理解しにくいところがあります。「お茶を飲む」、「お酒を飲む」はいいんですが、「条件をのむ」は少し違いますね。ほかには、「靴下」は靴の下ではなく靴の中に履いているものですよ。でも「靴中」とは言わない、などです。

しかし、最近ここ六年間は言葉の成立の

歴史を調べています。たとえば日本から中国に入っていた言葉がたくさんありますが、それがいつごろ入っていたのかとか、日本語での本来の意味と違うところはないのかとか。例を挙げると、「談判」という言葉は、もともとは日本語で、中国に入っていた言葉です。日本ではもうあまり使われていなくて、「談判」のかわりに「交渉」という言葉を使いますが、中国では「交渉」という言葉より、「談判」がよく使われています。逆転してしまっただんです。そういった言葉の変化から、社会的、文化的に何がいえるかを研究しています。

○きっかけ

僕は中国の外国語大学の日本語学部出身でしたので、日本語を話す、聞く、読む、書く訓練をずっと受けてきました。だから日本語の運用能力は身についたんです。しかし、いろいろな言語学の理論のことなどを分析してみると、日本語を使って理論的に説明する力が弱かった。自分の弱点の克服というか、できないことをやらないと、という気持ちがあり、それが今の研究に至るきっかけとなったのかもしれない。言語学は理論が多いですが、ただ話せるだけでは満足できませんよね。理論的にやってみないことにはなんともいえないことがたくさんあります。言葉の歴史を調べること

言語を習得することは、自分自身を豊かにすること。世界を広げること。

も理論の裏づけになります。あと、師のスタイルに魅せられて、少しでも先生に近づきたいという気持ちもあつたんです。

日本語を選んだきっかけは、僕が大学に入るころ、ちょうど中日友好のブームだったんですね。父の薦めもありました。

日本語をやつて、よかつたと思いますよ。言葉というのは、自分の世界を広げられます。大げさかもしれないですが、新しい世界が開けるといふか、人生が二倍楽しめると思います。だから僕は、外国語ができるということ誇りに思っています。皆さんも、中国語でも英語でもよいですから、ぜひ使えるようになって、自分を豊かにしてください。

○大学時代

大学時代は勉強一筋ですね。テレビもなかったし、ラジオや映画が娯楽という時代でした。部活もなかったです。

あとは本当に、先生に恵まれたと思います。日本に来てからは友達もいっぱい作りましたね。

○趣味

趣味は、ないことはないのですが。散歩かな。散歩は、いろいろなアイデアが浮かんできます。あと、歌が好きです。日本語を勉強するというのもあつたのですが、日本の歌も歌いますよ。ごくたまにですが、カラオケにも行きます。それから料理を作ったりしますね。餃子とか、おでんも作りますよ。あと、ラジオをよく聴きます。

○総科で言語を学ぶ・・・

総合科学部で言語を学ぶにあたって、確かにウィークポイントはあります。たとえば、カリキュラムが貧弱という点です。外国語を専門に学ぶ学部比べたら、言語の科目がやはり少ないですから。しかし、総合科学部だからこそこそできることがあるんですよ。授業や周りの学生が多様ですから、そこから豊かになれるんです。自分の専門以外のことが吸収できるのは良いことです。外国語大学では、専門的に自分がやりたい言語が学べますが、文化とか歴史とか、ひよっとしたら自分の国のことも知らない、ということになる可能性がある。一方、総

合科学部にはいろいろなメニューが用意されていて、自由にとることができる。自分の専門をやりながら違う分野の人の話が聞ける。そういう所が、総合科学部で言語を学ぶにあたって良い所だと思います。しかし同時に、ウィークポイントをどうやって克服するかが課題です。

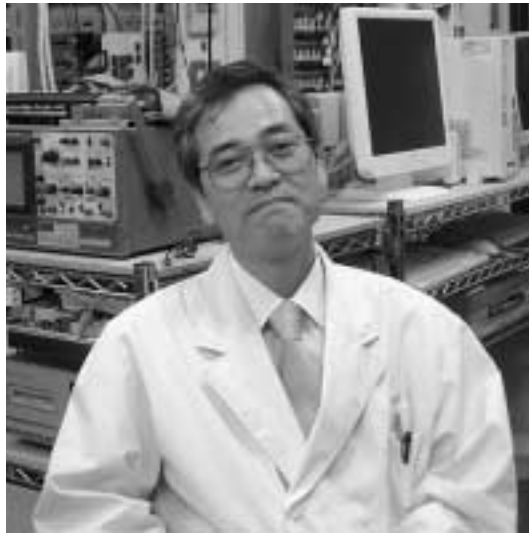
○学生に一言

一つは、健康第一ということですね。アルバイトなどは、社会勉強として良いことですが、不規則な生活になっては、授業中も眠くなるし健康も損ないます。健康に留意して、規則正しい生活を送ってもらいたいと思います。それからやはり、学生ですから、勉強してほしいなあという気持ちがあります。いろいろな本を読んだりして、今のうちから、自分を豊かにしていただく。

(担当 17生 石谷絢)

情報行動科学プログラム

坂田 省吾研究室



○研究内容

オペラントという方法でネズミ自体が見ている世界を行動で示させる研究をしています。その目的は、ネズミがどのように時間を知覚しているかを探ることです。私自身の興味が時間というものにあつて、我々人間が物理的な時間が経過するのを短いと感じたり長いと感じたりする感じ方は、どこでどうやって処理されているのか興味があります。我々人間は、実験として時間の長さの感じ方が主観によって違うことを知っていますが、動物でも同じように時間の感じ方が主観的に異なるのであれば、動物の脳内を探る研究でそういう時間知覚を明らかにできるのではないかと考えて実験を続けています。

実験の具体例を一つ挙げると、ネズミを入れた箱の中にレバーが一つ出ている、そのレバーを押すと反対のレバーが出てくるようになってきます。その反対のレバーを押すと餌が出てくる仕組みにして、ネズミをトレーニングしてどうやったら餌が得ら

れるかという学習をさせます。そこにある条件、例えば三十秒たつてから反対のレバーを押すと餌が出てきて、三十秒経つ前にいくらレバーを押しても餌は出ないという条件を加えます。すると、ネズミはだんだん三十秒という時間を理解してきて、結果として、反応が三十秒時点のところが増えていくんです。そして、そういう反応が出るということは、少なくとも脳の中で時間の感覚の処理をしているということですから、脳波を測ったりしてそのメカニズムを探っていこうとしています。ネズミの脳は小さいと思うかもしれないけど、やはりいろいろな場所があつて、それぞれに活動は違います。それらが同じ時系列でそれぞれどのように働いているのか比較しながら、時間を知覚する仕組みを研究しています。

○学生生活

私は広島大学総合科学部第三期生なんです。一年生の時は勉強より遊びや友達作りが主でした。総合科学部はいろいろな地方から人が集まって来ていて、北は北海道から南は沖縄までいろいろな出身の友達が出てきて、夏休み、冬休みや春休みの長期休暇の時はいろいろな出身の友達の家遊びに行っていました。楽しかったですよ。二年生になると、今と同じように多少専門的になってきて、コース(今のプログラム)

部屋番号

A228 or A212

オフィスアワー

月 8 : 30 ~ 10 : 00

メールアドレス

ssakata@hiroshima-u.ac.jp

授業内容

生理心理学 心理学 B
生物心理学 行動科学演習 B
心理学基礎実験 情報活用演習

どうせならやりたいことをやれば良いじゃないですか。

を専攻しなければなりません。当時の情報行動科学コースは、コンピュータも生命科学も心理学もできたので、なんでもできそうかなと思つて情報行動科学コースを選びました。別に一年生の時から心理に進もうと考えていたわけではなかったんです。情報行動科学コースに入つて、自分の一番興味があるものは何だろうと考えたときに、「時間」というものが思い浮かびました。小

学校の頃は暇で、なかなか夏休みは来ないし、早くお正月になつてお年玉がほしいと思うのにお正月はなかなか来ない。でもそれが中学校、高校となつたらあつという間に一日が終わつてしまふ、もうまた新学期が始まつてしまふというように感じる。大

学生になつてもやっぱりどんどん時間の流れを早く感じるようになっていて、「時間」というものに興味を持つていました。そこで時間的なものを、動物も好きでしたから動物を使って客観的に測定できないかなと思つたんです。そうしたら私がついていた先生が動物心理学について話されて、興味を持ったので、三年生の後期から実験室に

入りました。そこでいろいろな実験を試してみたら面白い結果が出始めて、じゃあこのまま卒論を書いて、大学院に行きたいと思つて、今に至ります。

○将来の夢

時間というものを我々がどうやって感じているのか、そのメカニズムが明らかになつたら、それを制御したいです。

○学生に一言

あんまり脅迫的に自分がやりたいことを見つけないでほしいと考える必要はないけど、自分の好きなことを見つけて、一生懸命に打ち込んで欲しいです。

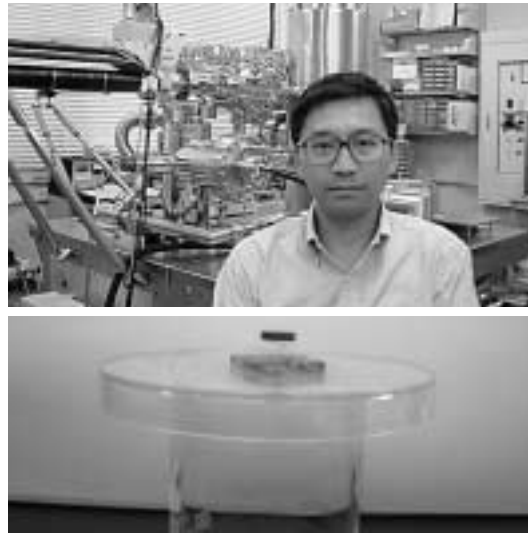
(担当 17生 福間いずみ)



◀左の写真は実験室のネズミです。この脳波を測ったりしています。人になれています。

創造科学プログラム

浴野 稔一研究室



○研究内容

超伝導物質の基本的な性質を調べています。超伝導とは電気抵抗なしで電気が流れる現象です。その基本的な性質の調べ方は、トンネル効果というものを利用して行っています。トンネル効果とは、二つの金属を数ナノメートル程度に近づけると、金属から金属へ電子がすり抜け微弱な電流が流れる現象です。それは量子力学で最も基本的な現象として知られています。普段生活を送っていても気付かないけれど、日常生活に関わる様々なエレクトロニクス製品が動かし、その役目を果たすためには欠かせない現象なのです。

研究では、トンネル効果を応用したトンネル顕微鏡というものを利用しています。超伝導は低温（せいぜい絶対温度二十ケルビンぐらい）で起こるとされてきましたが、二十年ほど前に三十ケルビンで超伝導を示すセラミクス（陶磁器の一種）超伝導体が、スイスで発見されたのです。その後、徐々にさらに高い温度で超伝導が起こる物質が

発見されており、これに触発されて、現在は高温（日常生活でいうと常温のことを指す）で超伝導が起こる物質を見つけるためのヒントを探っています。基本的な研究をしています。それを発見するのは容易なことではありません。

○研究目的

研究をしていく上で最終的に目指すところは、やはり高温超伝導物質を見つけたいことです。そのためには超伝導の基本的な性質を十分に理解することが大切であり、その性質も詳しく分かっているため、現在は（そしてたぶん将来も）基本的な性質を調べることに重きを置いています。高温超伝導物質の新たな発見によって、電気が流れる際に電気抵抗がないため、無駄なエネルギーの消費なしで電力移送をすることができるようになります。そして、高温超伝導物質を発見すれば、最近注目されているリニアモーターカーも、より実用的なものを作ることができます。携帯電話の電波を選び分ける高性能なフィルタも身近なものになります。

○きっかけ

卒業研究は超伝導関連の研究室に入っていましたので、これがかきっかけといえそうですね。しかし、自分が求めていたものはこれだ”と思ったわけでもなく、こん

部屋番号

B213

オフィスアワー

水13:00~14:30

メールアドレス

ekino@hiroshima-u.ac.jp

授業内容

物理学実験 基礎物理学 I

電磁気学 II

物理学IV 物質科学実験 C

漠然とでいいからやりたいことを見つけてようとしてください。
そして、それを実現するために根気よく努力してください。

なに長くこの研究を続けることになるとは思わなかったです。それだけ自分にとってこの研究内容は魅力があったのだと思います。今、自分が研究を続けているのは、その研究室の先生やその後お世話になった先生が与えてくれた影響が大きかったからだと思います。

○振り返ってみてどんな学生だったか？
何に興味があったか？

そんな振り返る年でもないですけどね(笑)。とりわけエレクトロニクス(電子工学)や無線技術に興味がありました。昔でいうラジオ少年でしたね。今ではラジオ少年という言葉はほとんど使われませんけどね。資格としてはアマチュア無線技士(第一級)の免許を持っています(コールサイン JH4ATI)。中高時代は無線機を作っては壊し、作っては壊しを繰り返していました。性能の向上を求めて一日たりとも同じ回路を保っていたことはないですね。今思えば、この時養われた、「なぜだろう。」と問う心が現在の研究態度のバックグラウンドになっているような気がします。とに

かくそんな物を作るのが好きな子でした。半田ごてを手から離しませんでした。まあそういった感じで、自然に、将来は試行錯誤を重ねる研究のようなものをそのまま続けていけるのだろうという気もしていました。漠然とね。そんなわけで、卒業研究も気がつけば実験関連の研究室に入っていました。

○趣味

やっぱり生涯の趣味はエレクトロニクスと無線技術の実践。電波というものに不思議な魅力を感じています。何が面白いかというと、それを使って地球の裏側の見知らぬ人と交信するための装置を作ることそのものがやっぱり面白い。作った本人にしか決して分からない達成感というものがあります。現在はとてもそんな時間はとれないけれど、たまに子供とラジオを作ったりしていますよ。だからその延長にある研究もまた趣味といってもよい。無線機を作ることに注がれていた情熱は、今研究に注がれています。実験装置を作るのも面白い。研究が趣味だとはあまり思われたくないですけど(笑)。

○学生に一言

うーん、なかなか難しいね。こういった研究をどのように全く異なる分野の諸君にアピールし、意義を認めてもらうのか。全ての分野は絡み合っていると私は思っています。科学というものは、例えば自分が発見したものが、自分の好むと好まざるに関係なく、いつかどこかで何か役に立つ、そんなものだと思います。自分の思うところを極めると、ほかの分野と融合してそれが思いがけないところで新しいものを生む可能性がある。漠然とでいいからやりたいことを見つけてようとしてください。そして、それを実現するために根気よく努力してください。

(担当 17生 山手隆三)